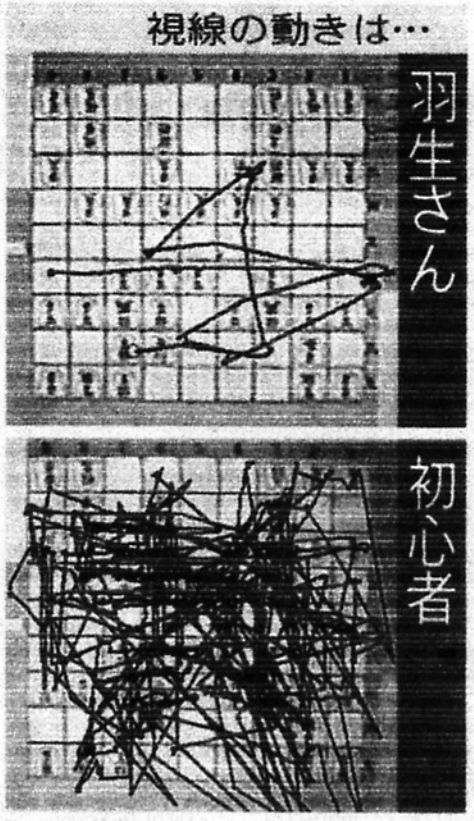
2003年6月11日

朝日新聞 朝刊 文化総合面

瞬時に把握 次の手直観

日本認知科学会 羽生名人の「強さ」分析



わずか3秒で盤面を記憶し、一瞬のうちに次の一手を絞り込む。将棋の名人位に返り咲いたばかりの羽生善治さんの頭脳の一端が分析され、7日、東京都内で開かれた日本認知科学会大会で、羽生さん本人を招いて報告された。認知科学の研究者が、羽生さんの思考過程を観察した。（鈴木京一）

研究したのは、公立はこだて未来大の松原仁教授と、電気通信大の伊藤毅志助手。将棋のようなゲームを材料に、人間の思考、とりわけ直観を分析してきた。

チェスではコンピューターが人間に勝ったが、将棋はまだアマ四、五段レベル。伊藤さんは「将棋ソフトは一般に、候補手をしらみつぶしに先読みするが、人間の思考は違うのではないか」と話す。学会大会の特別講演に羽生さんを招いたのを機会に、4月末、被験者になってもらった。

羽生善治さん

羽生さんが、将棋のある局面を何秒で記憶し、どれだけ正確に再現できるか実験した。アマ8級程度の初心者は3分以上、アマ三段程度の中級者でも40秒以上かかったが、羽生さんは3秒ほどで記憶、ほぼ完全に再現できた。

アイカメラで視線の動きを追ったところ、初心者は盤面全体をくまなく、中級者は要所となる部分を注目しているのに対し、羽生さんは特定の駒に視線をとどめず、全体を見渡していた。

このほか、羽生さんがある局面で次の一手をどう選ぶか、思考過程を話してもらって記録した。初心者や中級者の検討時間は長いが、羽生さんは二言、三言で絞り込む。

伊藤さんは「初心者は駒を一個一個、中級者は固まりで覚えているが、羽生さんは盤面全体を絵のように覚え、次の手も一瞬で浮かぶ」とみる。

羽生さん自身は講演会で、「考えられる手を全部読んでいたらきりがない。カメラのフォーカスが合うように、候補手が2、3手に絞り込まれ、直観で良さそうな手から読みを深める」と表現した。「先を読む力は、20代のころが良かったと思う。でも今は千局以上経験しており、似たような局面にどこかで出合っている。それが方向を絞るヒントになる」とも。

羽生さんの直観がどのように生まれているか、となると未解明だ。

実験の折、羽生さんに、昨年のコンピューター将棋選手権で優勝したソフトと対戦してもらったが、羽生さんの圧勝だった。「一手一手がなるほどな、と思わせるレベルになってくれたら楽しいですね」と羽生さんは余裕で締めくくった。

次代の振付家 8人が候補に

7月に公開審査会

次代を担う振付家の発掘をめざす「トヨタコレオグラフィーアワード」。その最終審査会に進む8人が決まった。

顔ぶれは大植真太郎、岡登志子、黒田育世、白井剛、濱谷由美子、林貞之、ボヴェ太郎、山崎広太（50音順）。

公開審査会は7月19、20の両日、東京・三軒茶屋のシアタートラムで。8人が自作を30分以内で